

ケーナおよびイーシャー・ウパニシャッド

湯 田 豊

I. ケーナ・ウパニシャッド

ケーナ・ウパニシャッド Kena Upaniṣad は、タラヴァカーラ・ウパニシャッド *Talavakāra Upaniṣad* と呼ばれる。このウパニシャッドは *kena* [誰によって] という言葉を以て始まる。それゆえに、それは *Kena Upaniṣad* と名づけられた。それはサーマ・ヴェーダに所属し、ジャイミニヤー・ウパニシャッド・ブラーフマナの不可欠の1部分を構成する。ケーナ・ウパニシャッドは4つのセクションから構成され、部分的に韻文で書かれている。その題目にもかかわらず、ジャイミニヤー・ウパニシャッドはウパニシャッドでもなければブラーフマナでもなく、その中間のテキスト、すなわち、アーラニヤカ〔森林書〕である。このウパニシャッドにおいては、人間によって認識され得ないブラフマン *brahman* が力説されている。ブラフマンは究極の实在であり、人間によって認識され得ない。現象界のかなたに存在する、計り知れない神秘に対する信仰が、ケーナ・ウパニシャッドに見いだされる。誰もブラフマンを教えることも、それを理解することも出来ない。しかし、それを理解出来ない人が、実は、それを知っているのかもしれない・・・

ケーナ・ウパニシャッドにおいて特にわたくしの興味をそそるのは、ブラフマンがいわば妖怪 *yakṣa* としてスケッチされていることである。ブラフマンは不可解であり、神々でさえブラフマンを知らないのである。もちろん、人間はブラフマンを認識することは出来ない。しかるに、ブラフマンに関する認識は神秘的な方法で得られるというのである。以下において、わたくしはこのウパニシャッドをサンスクリットの原文から翻訳し、作者の声をなるべく忠実に再現したいと思う。わたく

しの使用したテキストは *Eighteen Principal Upaniṣads*, Vol. I., Edited by V. P. Limaye and R. D. Vadekar, 1958, に収められているそれである。ケーナ・ウパニシャッドに対するシャンカラの注釈に関しては, *Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ*, 6 を参照。

〔原文および翻訳〕

ケーナ・ウパニシャッド

セクション I

1. keneṣitaṃ patati preṣitaṃ manah̐ kena prāṇah̐ prathamah̐
praiti yuktaḥ |
keneṣitāṃ vācamimāṃ vadanti cakṣuḥ śrotraṃ ka u devo
yunakti ||

〔翻訳〕

1. 誰によって送られ, 遣わされ, 思考は飛んで行くのか?
誰によって繋がれ, 最初のものとして息は前へ行くのか?
誰によって送られ, 人々はこの言葉を語るのか?
そして, 目と耳を繋ぐのは, どの神か?

I, 1 において弟子は師匠にこのように問うのである。以下において師匠は弟子に対して次のように答える——

2. śrotrasya śrotraṃ manaso mano yad vāco ha vācaṃ sa u
prāṇasya prāṇah̐ |
cakṣuṣaścakṣuratimucya dhīrāḥ pretyāsmālokaḍamṛtā
bhavanti ||

2. 耳の耳, 思考の思考, 言葉の言葉, そして息の息, 目の目——
それらから解放され, 賢者はこの世を去る時に不死になる。

耳の耳 śrotrasya śrotram などというのは、耳などが聞いたりするのではなく、耳などは知覚の手段にすぎないことを示唆する。耳などは知覚の手段であり、実際に知覚をするのはアートマン〔本来的自己〕ないしブラフマンである。アートマンないしブラフマンは、ここでは知覚の主体として示唆されている。シャンカラの注釈によれば、耳の耳という語によって意味されるのは、「人は、これによって聞く」ということである。耳は音声を聞くための手段として理解される。人に音声を聞かせるもの、あるいは音声の主体が「耳の耳」である。そして思考、言葉の言葉、息の息、および目の目に関しても同じことが言える。

3. na tatra cakṣurgacchati na vāggacchati no manah |
na vidmo na vijānīmo yathaitadanuśiṣyāt ||

3. そこへ目は行かない、言葉は行かない、思考も。
どのようにこれを人が教えるべきか、われわれは知らない、われわれは認識しない。

「そこへ」 tatra を、シャンカラは、耳などの知覚器官の主体であるブラフマンのもとへ、というふうに解釈している。思考manasでさえそこへ行かない。思考するのは思考ではなく、アートマンないしブラフマンであるというのが、シャンカラの解釈である。アートマンあるいはブラフマンは知覚されない。それゆえに、知覚され得ないブラフマンあるいは知覚の主体に関して、師匠は「どのようにこれを人が教えるべきか、われわれは知らない、われわれは認識しない」と、このように弟子に向かって言うのである。

4. anyadeva tadviditādatho aviditādadhi |
iti śuśrūma pūrveṣāṃ ye nastadvyācacakṣire ||

4. それは知られているものと異なり、知られていないものを超えている、
とこのように古代の人々がわれわれに説明したことを、われわれ

は彼らから聞いた。

5. yadvācā 'nabhyuditam yena vāgabhyudyate I
tadeva brahma tvam viddhi nedam yadidamupāsate II

5. 言葉によって表現されていないもの、それによって言葉が表現されるもの、
まさに、それをお前はブラフマンであると知れ！ 人々がここで熱心に求めるこのものではなく。

「言葉によって表現されていないもの、それによって言葉が表現されていないもの」というのは、知覚の主体として理解される。それは言葉の言葉に他ならない。「人々がここで熱心に求めるこのものではなく」[nedam yadidamupāsate], 「まさに、それをお前はブラフマンであると知れ！」と、このようにわれわれのテキストは言う。Nedam yadidamupāsate というテキストを、ドイセンは Nicht jenes, was man dort verehrt と訳している。ドイセンは upās という語を verehren [崇拜する] と翻訳した。ドイセンのこの訳は、いわば、標準的な訳とみなされる。現代のフランスのインド学者ルヌーは、このテキストを non pas ce qu'on révère ici pour tel と翻訳した。マクス・ミュラーおよびラーダークリシュナンは、upās を adore と英訳した。シャンカラは upāsate dhyāyanti と注釈している。シャンカラの解釈に従えば、upās は瞑想する、あるいは静慮するなどと訳されるであろう。わたくし自身は、upās を熱心に求める、というふうに翻訳する。Upās を瞑想すると訳してもよい、とわたくしは思う。しかし人がブラフマンについて瞑想するとしても、それはブラフマンを熱心に求めてそうするのである。

6. yanmanasā na manute yenāhurmano matam |
tadeva brahma tvam viddhi nedam yadidamupāsate ||

6. 思考によって人が考えないもの、それによって思考が考えられていると人々が言うもの、

まさに、それをお前は知れ！ 人々がここで熱心に求めている
このものではなく。

7. yaccakṣuṣā na paśyati yena cakṣūṃṣi paśyati |
tadeva brahma tvam viddhi nedaṃ yadidamupāsate ||

7. 目によって人が見ないもの、それによって目が見るもの、
まさに、それをお前はブラフマンであると知れ！ 人々がここで
熱心に求めるこのものではなく。

8. yacchrotreṇa na śṛṇoti yena śrotramidaṃ śrutam |
tadeva brahma tvam viddhi nedaṃ yadidamupāsate ||

8. 耳によって人が聞かないもの、それによって耳が聞かれるもの、
まさに、それをお前はブラフマンであると知れ！ 人々がここで
熱心に求めるこのものではなく。

9. yatprāṇena na prāṇiti yena prāṇaḥ prāṇīyate |
tadeva brahma tvam viddhi nedaṃ yadidamupāsate ||

9. 息によって人が息をしないもの、それによって息が導かれるもの
まさに、それをお前はブラフマンであると知れ！ 人々がここで
熱心に求めるこのものではなく。

セクションII

1. yadi manyase suvedeti daharamevāpi nūnam tvam vettha
brahmano rūpam | yadasya tvam yadasya devesu | atha nu
mīmāmsyameva te manye veditam ||

1. もしも、お前が「わたしは、よく知っている」と考えるならば、
 確かにお前は、ほんのわずかの部分、ブラフマンの形態、お前
 あるそれ、および神々の間のそれを知っているだけだ。「〔それは
 すでに〕知られている、とわたしは考えます」とお前が思っ
 ているとしても、それは今や、お前によって探究されねばならぬ。
2. nāhaṃ manye suvedeti no na vedeti veda ca |
 yo nastadveda tadveda no na vedeti veda ca ||
2. 〔弟子は次のように言った〕——「わたしは、よく知っている」
 とも考えませんし、「わたしは知らない」とも、わたしは知りま
 せん。われわれの間でそれを知っている人は、知っています。
 しかし、「わたしは、それを知らない」と彼は知りません。
3. yasyāmatam tasya matam matam yasya na veda saḥ |
 avijñātam vijñātām vijñātamavijñātām ||
3. 〔師匠は次のように言った〕——その人によって考えられたこと
 のないもの、それはその人によって考えられた。その人によって
 考えられたもの、それを彼は知らない。
 認識している人々によって、それは認識されていない。認識して
 いない人々によってそれは認識されている。
4. pratibodhaviditam matamamṛtatvaṃ hi vindate |
 ātmanā vindate vīryaṃ vidyayā vindate 'mṛtam ||
4. 目覚めによって知られる時に、それは考えられている。なぜ
 なら、〔目覚めによって〕人は不死を見いだすから。
 人はアートマン〔自己〕によって力を見いだし、知識によって
 不死を見いだす。
5. iha cedavedīdatha satyamasti na cedihāvedīnmahatī vinaṣṭih |

bhūteṣu bhūteṣu vicitrya dhīrāḥ pretyāsmāḥ lokādamṛtā
bhavanti ॥

5. もしも、人がここでそれを知ったとすれば、それが真理である。
もしも、人がここでそれを知っていなかったとすれば、大いなる
破滅がある。
賢者はこれをあらゆる生き物の中に認め、この世を去ったあとで
不死になる。

セクションIII

1. brahma ha devebhyo vijigye | tasya ha brahmaṇo vijaye devā
ahamīyante | ta aikṣantāsmākamevāyaṃ vijayo 'smā-
kamevāyaṃ mahimeti II

1. ブラフマンは、神々のために勝利を得た。このブラフマンの勝利
に神々は熱狂した。神々は次のように考えた——「この勝利は、
まさにわれわれのものだ。この偉大さは、われわれのものだ」。

2. taddhaiṣāṃ vijajñau | tebhyo ha prādurbabhūva | tanna
vyajānata kimidaṃ yakṣamiti ॥

2. 神々の〔熱狂〕を理解して、ブラフマンは彼らの前に現われた。
彼らは、それを理解しなかった。「この妖怪〔ヤクシャ〕は何
であらうか？」と彼らは言った。

シャンカラによれば、ヤクシャは尊敬すべき、大いなる存在である。
ヤクシャは、精神、不思議なもの、驚くべき事物、怪物、幽霊などと訳
される。ルヌーはヤクシャを phantasme〔幻影、幻想〕と訳している。
わたくしは yakṣa を“妖怪”と訳したいと思う。エルテルはこの語を
spectre と英訳している。いずれにせよ、ヤクシャは超自然的な不思議

な存在である。

3. te 'gnimabruvan | jātaveda etadvijānīhi kimetadyakṣamiti |
tatheti ||

3. 彼らは、アグニに言った——「ジャータヴェーダス〔火〕よ！
この妖怪が何であるか、このことを、お前は認識せよ！」と。
「はい」〔とアグニは言った〕。

4. tadabhyadravat | tamabhyavadatko 'sīti | agnirvā ahamasmīty
abravījjātavedo vā ahamasmīti ||

4. それはブラフマンの方へ走って行った。「お前は誰か？」とブラ
フマンはアグニに語りかけた。「わたしは実にアグニです、ある
いは、わたしはジャータヴェーダスです」と〔アグニは言った〕。

5. tasmimstvayi kiṃ vīryamiti | apīdaṃ sarvaṃ daheyaṃ
yadidaṃ pṛthivyāmiti ||

5. 「そんなお前に、どんな力があるのか？」。
「この地上にある、このすべてのものさえ、わたしは焼くことが
出来ます」と〔アグニは言った〕。

6. tasmai tṛṇaṃ nidadhau | etaddaheti | tadupapreyāya sarva-
javena | tanna śaśāka dagdhum | sa tata eva nivavrte |
naitadaśakaṃ vijñātum yadetadyakṣamiti ||

6. ブラフマンは、アグニの前に1本の藁の茎を置いた。「これを焼
け！」と、それは言った。アグニは全速力でそれに突進したが、
それを焼くことは出来なかった。「この妖怪が何であるかを、
わたしは認識することが出来なかった」と言って、アグニはそこ
から〔神々の所に〕帰って来た。

7. atha vāyumabruvan | vāyavetadvijānīhi kimetadyakṣamiti |
tatheti ||

7. それから、彼らはヴァーユに言った——「この妖怪が何であるかを、お前は認識せよ！」と。「はい」と〔ヴァーユは言った〕。

8. tadabhyadravat | tamabhyavadatko 'sīti | vāyurvā
ahamasmītyabravīnmātariśvā vā ahamasmīti ||

8. ヴァーユはブラフマンの方へ走って行った。「お前は誰か？」と〔ブラフマンは〕それに語りかけた。「わたしは実にヴァーユです、あるいはマータリシュヴァン〔風〕です」と、〔ヴァーユは言った〕。

9. tasmimṣtvayi kiṃ vīryamiti | apīdaṃ sarvamādadiya yadidaṃ
pṛthivyāmiti ||

9. 「そんなお前に、どんな力があるのか」と。
「この地上にある、すべてのもののさえ、わたしは払い掃くことが出来ます」と。

10. tasmai tṛṇaṃ nidadhau | etadādātsveti | tadupapreyāya sarva-
javena | tanna śaśākā 'dātum | sa tata eva nivavṛte |
naitadaśakaṃ vijñātum yadetadyakṣamiti ||

10. 〔ブラフマンは〕その前に1本の藁の茎を置いた——「お前はこれを払い掃け！」と、〔それは言った〕。ヴァーユは全速力でそれに突進したが、それを払い掃くことは出来なかった。「この妖怪が何であるかを、わたしは認識することが出来なかった」と言って、ヴァーユはそこから〔神々の所に〕帰って来た。

11. athendramabruvan | maghavannetadvijānīhi kimetadyak-

ṣamiti | tatheti | tadabhyadravat | tasmāttirodadhe ||

11. 「おお、マガヴァン〔インドラ〕よ！

この妖怪が何であるかを、お前は認識せよ！」と。「はい」と、
〔これは言った〕。インドラはブラフマンの方へ走って行った。
ブラフマンは彼から隠れてしまった。

12. sa tasminnevākāṣe striyamājagāma bahuśobhamānāmumām
haimavatīm | tāṃ hovāca kimetadyakṣamiti ||

12. まさに、その同じ虚空において、インドラは非常に美しい1人の
女性、雪山の娘ウマーに出会った。「この妖怪は何であるか？」
と、彼は彼女に言った。

セクションIV

1. sā brahmeti hovāca | brahmaṇo vā etadvijaye mahīyadhvamiti
| tato haiva vidāṃcakāra brahmeti ||

1. 「それは、ブラフマンです」と彼女は言った。「実に、ブラフマ
ンの勝利に、あなた方は熱狂しています」と〔彼女は言った〕。
そこで、それがブラフマンであることを彼女は知った。

2. tasmādvā ete devā atitarāmivānyāndevān | yadagnirvāyurin-
draste hyenannediṣṭhaṃ paspr̥ṣuḥ | te hyenatprathamavidāṃ-
cakāra brahmeti ||

2. それゆえに、実に、これらの神々、すなわち、アグニ、ヴァーユ
およびインドラは、他の神々よりも、いわば、優れている。なぜ
なら、彼らは最も近くで、これ〔ブラフマン〕に触れたからで
ある。なぜなら、それが、ブラフマンであることを彼らは最初に

知ったからである。

「なぜなら、それがブラフマンであることを彼らは最初に知ったからである」という文章に関して、「彼らは最初に知ったからである」[te hy enat prathamo vidāṃ cakāra] というテキストは、文法的に正しくないように思われる。Te vidāṃ cakāra は、ルヌーによって提案されたように、te hy enat prathame vidāṃ cakruḥ と訂正されるべきであろう。シャンカラも vidāṃ cakāra を vidāṃ cakruḥ と解釈している。われわれのテキストは、どうして vidāṃ cakāra という単数形を用いているのであろうか？ 最も近くで、ブラフマンに触れたのはインドラである。アグニ、ヴァーユおよびインドラの中で特に優れてインドラが「それがブラフマンであることを知った」のである。彼ら、特に優れてインドラが最初にブラフマンを知ったことを強調するために、te vidāṃ cakāra という文法のルールに反する語法が用いられたのであろうか？

3. tasmādvā indro 'titarāṃivānyāndevān | sa hyenannediṣṭhaṃ pasparśa | sa hyenatprathamo vidāṃcakāra brahmeti ||

3. それゆえに、実に、インドラは他の神々よりも、いわば、優れている。なぜなら、インドラは最も近くで、これに触れたからである。それがブラフマンであることを、彼は最初に知ったからである。

4. tasyaiṣa ādeśaḥ | yadetadvidyuto vyadyutadā 3 itīnnyamīṣadā 3 ityadhidaivatam ||

4. これが、ブラフマンに関する教えである——稲妻が光った時に「人々が言う」ああ！「という叫び」、人がまばたいた時に、ああ！「という叫び」は神格に関連している。

「これがブラフマンに関する教えである」[tasyaiṣa ādeśaḥ] という

文句におけるアーデーシャ〔ādeśa〕を、わたくしは“教え”と翻訳した。文法上の用語としては、アーデーシャは“代用”あるいは“取り替え”を意味する。しかし、わたくしは、ここではアーデーシャを文法的な用語として認めない。

5. athādhyātmam | yadetadgacchatīva ca manah | anena
caitadupasmaratyabhīkṣṇam saṃkalpah ||

5. それから自己に関連して。そして思考がこれ〔ブラフマン〕の方にいわば行き、思考によって人がこれを繰り返し思い出すもの——それが意図〔saṃkalpa〕である。

6. taddha tadvanam nāma | tadvanamityupāsītavyam | sa ya
etadvedam veda | abhi hīnam sarvāṇi bhūtāni saṃvācchanti
||

6. それはタッドヴァナム〔ブラフマンを示す秘密の表示〕であると名づけられる。人は、それをタッドヴァナムとして熱心に求めるべきである。これをこのように知っている人——この人を、すべての生き物は愛する。

7. upaniṣadam bho brūhīti | uktā ta upaniṣat | brāhmīm vāva ta
upaniṣadamabrūmeti ||

7. 〔弟子は次のように言った〕——「尊敬に値する人よ！　ウパニシャッドを語って下さい！」と。

〔師匠は次のように答えた〕——「お前に対してウパニシャッドは語られた。実に、わたしはブラフマンのウパニシャッドをお前に語った。」

ウパニシャッド〔upaniṣad〕は一般に“秘密の教え”と翻訳される。シャンカラはこの箇所において「ウパニシャッドは瞑想されるべき秘密

の教えである〔upaniṣadam̐ rahasyam̐ yaccintyam〕と注釈している。しかし、ウパニシャッドという語によって意味されるのは秘密の教えではなく、むしろ熱心に求めることである。ブラフマンのウパニシャッド〔brāhmīm̐ upaniṣadam〕はブラフマンに関する秘密の教えではない。ブラフマンのウパニシャッドを、わたくしはブラフマンの等価であると理解する。ウパニシャッドは等価と解釈されてよいであろう。

8. tasyai tapo damaḥ karmeti pratiṣṭhā | vedāḥ sarvāṅgāni
satyamāyatanam ॥

8. それ〔ウパニシャッド〕の基礎は禁欲，自己抑制，および〔祭祀の〕行為である。ヴェーダは，〔その〕すべての手足である。真理は，〔その〕住み家である。

9. yo vā etāmevaṁ veda | apahatya pāpmānāmanante svarge
loke jyāye pratitiṣṭhati pratitiṣṭhati ॥

9. これ〔ウパニシャッド〕をこのように知っている人は悪を滅し，最も優れた無限の天界において確立される，確立される」と。

II. イーシアー・ウパニシャッド

イーシアー〔Īśā〕，あるいはイーシアーヴァースヤ〔Īśāvāsya〕という言葉で以て始まるために，このウパニシャッドはイーシアー・ウパニシャッド，あるいはイーシアーヴァースヤ・ウパニシャッドと名づけられる。このウパニシャッドは韻文で書かれ，恐らくヴェーダ期に成立したのであろう。イーシアーという語によって意味されるのは“主”ないし神である。イーシアー・ウパニシャッドはヤジュル・ヴェーダのサンヒター〔集録〕の1部分，すなわち，ヴァーージャサネーイ・サンヒター

の第40章である。このウパニシャッドには、マーディヤンディナおよびカーヌヴァという2つの校訂が存在する。わたくしの翻訳は、マーディヤンディナ版に基づいている。

イーシアー・ウパニシャッドは、極めて短い。しかし、それは非常に重要な内容を含んでいる。このウパニシャッドは人間の行為が効力を有しないこと、およびアートマンの認識を強調する。イーシアー・ウパニシャッドは、インド版のウパニシャッド全集あるいは選集において、その冒頭を飾るならわしである。イーシアー・ウパニシャッドを理解するために特に有益と思われるのは、パウル ティーメの論文 *Īsopanisad* 1-14 [Paul Thieme, *Kleine Schriften* Teil I, 1971] である。以下において、わたくしはイーシアー・ウパニシャッドを日本語に翻訳しよう。

〔原文および翻訳〕

1. Īśā vāsyamidam̐sarvaṃ yatkiṃ ca jagatyāṃ jagat |
tena tyaktena bhuñjīthā mā gr̥dhaḥ kasya sviddhanam ||

1. 大地の上を動いている、すべてのものは、主によって住まわれるべきである。

それゆえに、捨てられたもの〔進んで与えられたもの〕によって、お前は食物を食べるべきである。お前は、誰かの財産を欲しがるべきではない。

Īśāvāsyam は、Īśā + āvasyam に分解される。Īśāvāsyā〔現在形は ā-vasti〕は、衣服として着る、香りあるいは芳香によって充満される、住まわれるという意味である。わたくしは īśāvāsyam を「主によって住まわれるべきである」と翻訳した。そして、“主”は、ここではアートマン〔自己〕を意味する。

2. kurvanneveha kārmaṇi jijīviṣecchatam̐samāḥ |
evaṃ tvayi nānyatheto 'sti na karma lipyate nare ||

2. この世において、まさに行為をしながら、人は100年生きようと努力すべきである。

このように、これ以前に、お前に道はない。行為は人間に付着しない。

ティーメ [Īsopaniṣad 1-14, 92ページ] によれば、イーシアー・ウパニシャッド 2 は 1 と矛盾する。韻文 1 において、すべての生きものは主の住み家であると言われる。それゆえに、人は生き物を殺害すべきではないということが示唆されている。しかし韻文 2 においては、執着を離れていさえすれば、人は何をしても構わない、生き物を殺害してもよいと解釈される——行為は人間に付着しない。しかし、イーシアー・ウパニシャッドの作者は、生き物の殺害を否定している。生き物を人は殺害すべきではない。もしも人が生き物を殺害するとすれば、彼の「行為は人間に付着しない」という考えは否定される。ティーメの言うように、殺害は悪いだけでなく地獄において罰せられるべきである [Īsopaniṣad 1-14, 93ページ参照]。

3. asuryo nāma te lokā andhena tamasā 'vrtāḥ |
tamste pretyābhigacchati ye ke cātmahano janāḥ ||
3. それらの世界は鬼神的であると言われる。それらは盲目の闇によって覆われている。
アートマンを殺害する人々は、死後に、それらの世界に行く。
4. anejadekaṃ manaso javiyo nainaddevā āpnuvan pūrvamarṣat
| taddhāvato 'nyānatyeti tiṣṭhat tasminnapo mātariśvā da-
dhāti ||
4. 1つであるものは、動いていなくても、思考よりも速い。
それが前を急いでいた時に、神々はこれに到達しなかった [これをとらえなかった]。静止しているけれども、それ [1つであるもの] は走っている他のものを追い越す。マータリシュヴァン [風] は、その中に水を置く。

5. tadejati tannaijati taddūre tadvantike |
tadantarasya sarvasya tadu sarvasyāsyā bāhyataḥ ||

5. それは動く。それは動かない。それは遠くにある。そして、それは近くにある。
それは、この一切の内部にある。そして、それはこの一切の外部にある。

イーシアー・ウパニシャッド、4-5において、1つであるものがパラドックス的であることが強調される。1つであるものは認識され得ない——これが4-5のテキストの趣旨である〔テーマ、94ページ参照〕。しかし、イーシアー・ウパニシャッドの作者は、1つであるものを認識出来るという立場に立って発言している。韻文6が、恐らく、このウパニシャッドの作者の真意を代表するであろう。

6. yastu sarvāṇi bhūtānyātmanne vānupaśyati |
sarvabhūteṣu cātmanam tato na vijugupsate ||

6. すべての存在を、まさに自己において見る人、そして、自己をすべての存在において見る人——その人から、それは身を隠そうとしない。

「すべての存在を、まさに自己において見る人、そして、自己をすべての存在において見る人」は、1つであるものを認識するのである。

7. yasmin sarvāṇibhūtānyātmaivābhūd vijānataḥ |
tatra ko mohaḥ kaḥ śoka ekatvamanupaśyataḥ ||

7. 認識している人の自己がすべての存在になった時に、1つであることを認識している人にとって、どんな眩惑、どんな悲しみが存在するであろうか？

8. sa paryagācchukramakāyamavraṇamasnāviraṃ śuddham-
apāpaviddham |
kavirmanisī paribhūḥ svayaṃbhūryāthātathyato 'rthān
vyadadhācchāśvatibhyaḥ samābhyaḥ ||

8. 身体のない、傷のない、臍のない、清浄な、そして悪によって
貫かれていない精液の中に、それは入った。
賢明な詩人、〔すべてを包摂するスヴァヤンブフー〔みずから
によって存在するもの〕として、それは永遠の真理のために真理
に基づいて事物を創った。

9. andhaṃ tamaḥ praviśanti ye 'vidyāmupāsate |
tato bhūya iva te tamo ya u vidyāyāṃ ratāḥ ||

9. 無知を熱心に求める人々は盲目の闇の中に入る。
しかし、知識を楽しむ人は、まさに、それよりも大きな闇の中
に入る。

10. anyadevāhurvidyay ā'nyadāhuravidyayā |
iti śuśrūma dhīrānāṃ ye nastadvicacakṣire ||

10. それは知識と完全に異なっている、と人々は言う。それは知識と
異なっている、と人々は言う。そのように、それを告げた賢者た
ちから、われわれは聞いた。

11. vidyāṃ cāvidyāṃ ca yastadvedobhayam saha |
avidyayā mṛtyuṃ tīrtvā vidyayā 'mṛtamaśnute ||

11. 知識と無知の2つを同時に知っている人、
彼は無知によって死を越え、知識によって不死に到達する。

イーシャー・ウパニシャッドの作者は、7-8を9-10において反論し、

11において結論を下した〔テーマ、95-96ページ参照〕。

12. andhaṃ tamaḥ praviśanti ye 'saṃbhūtimupāsate |
tato bhūya iva te tamo ya u saṃbhūtyāṃ ratāḥ ||

12. 非生成を熱心に求める人は、盲目の闇の中に入る。
しかし、生成を楽しむ人は、まさに、それよりも大きな闇の中に入る。

13. anyadevāhuḥ saṃbhavādanyadāhurasaṃbhavāt |
iti śuśrūma dhīrāṇāṃ ye nastad vicacakṣire ||

13. それは生成と完全に異なっている、と人々は言う。それは非生成と異なっている、と人々は言う。そのように、われわれにそれを告げた賢者たちから、われわれは聞いた。

14. saṃbhūtiṃ ca vināśaṃ ca yastadvedobhayaṃ saha |
vināśena mṛtyuṃ tīrtvā saṃbhūtyā 'mṛ tamaśnute ||

14. 生成と消滅の2つを同時に知っている人、彼は消滅によって死を越え、生成によって不死に到達する。

イーシャー・ウパニシャッド、12-13は反論であり、14は作者の結論である〔テーマ、96ページ参照〕。消滅とは身体の消滅であり、生成とは不死に到達することである。イーシャー・ウパニシャッド、1-14は、テーマの言うように首尾一貫した、意味のある全体として考察されるべきである。

15. hiraṇmayena pātreṇa satyasyāpihitaṃ mukham |
tattvaṃ pūṣannapāvṛṇu satyadharmāya dr̥ṣṭaye ||

15. 黄金の器によって、真理の顔は覆われている。

おお、プーシャンよ！ 真理の法を見るために、お前はその覆いを取り除け！

16. pūṣannekaṛse yama sūrya prājāpatya vyūha raśmīn samūha
tejah |
yatte rūpaṃ kalyāṇatamaṃ tatte paśyāmi yo 'sāvasau puruṣaḥ
so 'hamasmi ||

16. プーシャンよ！ ただ1人の聖仙よ！ 太陽よ！ プラジャーパ
ティの子孫よ！ お前は光線を広げよ！ 熱を集めよ！
最も美しいお前の姿、お前の姿を、わたしは見る。かなたのあの
プルシア、わたしが彼なのです。

17. vāyuranilamamṛtamathedaṃ bhasmāntaṃ śarīram |
oṃ krato smara kṛtaṃ smara krato smara kṛtaṃ smara ||

17. 息は不死の風の中に行き、身体は灰になって終わる。
オーム！ 意図よ！ なされたことを思い出せ！ 思い出せ！
意図よ！ なされたことを思い出せ！ 思い出せ！

18. agne naya supathā rāye asmān viśvāni deva vayunāni vidvān
| yuyodhyasmajjuhurāṇamenō bhūyiṣṭhām te namauktim
vidhema

18. アグニよ！ 良い道によって、われわれを富へ導け！ あらゆる
道を知っている神よ！ 道に迷っている過ちから、われわれを遠
ざけよ！
最も豊かな讃辞を、われわれは、あなたに捧げたい。

くしはこの機会に翻訳した。イーシアー・ウパニシャッドは、イーシアー・ウパニシャッドとも呼ばれる。ウパニシャッドのテキストは言語的および思想的に検討されるべきであろう。イーシアー・ウパニシャッドは哲学的なパラドックスを含む文献とみなされ、多くの人はこのウパニシャッドに見いだされる神秘思想に魅惑されている。しかし、パウル・ティエメの研究以来、わたくしはこのウパニシャッドの意図が必ずしもパラドックス的ないし神秘主義的でないことに気付くようになった。神秘主義とは何かということを明らかにしなければ、われわれはイーシアー・ウパニシャッドを神秘的であると呼ぶことは出来ない。それはともかく、ウパニシャッドの分析的な検討は、今後、ますます必要になるであろう。まず最初にテキストに権威を賦与し、それから、自己自身の考えをテキストの中に読み入れるというのは解釈学的な読み方である。われわれは、このような読み方を拒絶し、テキストに現われる作者の声を聞くように努力すべきである。われわれはテキストを正しく読む技術を身につけるべきである。原典を深い次元において良く読む人——まさに、彼こそ Philologe である。

〔1994年10月22日〕